

灯をみる

we stare at the light

林 勇気

hayashi yuki

2024年

4月13日〔土〕—5月12日〔日〕

ギャラリー・パルク

Gallery PARC



〔幻灯機制作協力〕

山内 鈴花

〔制作協力〕

ギャラリー・パルク

八木 慎二郎

〔出演者・制作参加協力〕

芦谷 由香

石井 誠

板金 夏音

植木 明日香

内田 好美

大石 英史

大歳 芽里

岡野 菜直

島本 恋奈

野口 彩陽

畑井 恵

〔翻訳〕

岡本 佐知子

あなたにとって「忘れられない一日」の写真を、そのエピソードとともに送ってください。

この林勇気呼びかけに対して、多くの片方から寄せられた写真は、映写用のガラス製スライドとなり、蝋燭の灯を光源とする幻灯機によって映写された。それぞれの写真提供者は、幻灯機によって淡く投影された自身の写真を見つめ、写真にまつわるエピソードを語り、林はその様子を撮影・録音した。

林勇気の個展「灯をみる」は、こうして収集・制作された11のイメージとエピソードをガラス製スライドとライトボックスによって展示するとともに、そのイメージを実際の幻灯機によってランダムに映写するもので、作品展示と映写による「場と時間」を作品として提示するものです。

会場を照らすライトボックスとプロジェクターの光は毎時刻0分ごとに消され、幻灯機に蝋燭の灯が入る。

暗闇に不鮮明に浮かび上がる「いつかの・誰かの」イメージは、やがてそれぞれの記憶から離れ、観る者それぞれの想像や記憶と反応しながら新たなストーリーを想起させます。

こうして灯が消えるまでのわずかな時間、記憶共有されこととなります。

林の近作・新作のいくつかを展示するとともに、蝋燭の灯による幻灯機によってイメージを映写する「場と時間」をも作品として提示します。

他者のプライベートな記憶の断片。記録と呼ぶには不確かな写真。蝋燭によって揺れる灯がつくりだす

灯をみる

蝋燭の灯で「忘れられない一日」に撮影された写真をみる。

そして、その時間を写真の提供者と他者が共有する。

そんな場と時間を作りたいと思った。

蝋燭の灯で映写できる幻灯機を制作した。

制作にあたり、明治時代の幻灯機を参照した。

暗闇の中で蝋燭が灯り、写真のイメージが立ち上がる。

幻灯機で映写された一枚の写真を静かにみつめる。

写真に内包されるストーリーに思いを馳せる。

灯で映写された写真は淡く、暖かい色で不鮮明だ。

時間が経過し蝋燭の灯は燃え尽きて消えてしまう。

はかない映像はあなたと私の心の奥に小さな光を灯す。

残像と共に。

映像のようならつろい。蝋燭が燃えつきること浮かび上がる残像としてのイメージ。この「場と時間」で私たちが見つめ・共有する(した)ものはたして何なのでしょう？

本展では開廊時間中の毎時0分ごとに、スタッフによってプロジェクターや照明の電源を切り、オリジナルの幻灯機に蝋燭に火を灯してスライドの映写をおこないます。

(1)日9回・各回10分程度・スライドは毎回異なります)

*映写中はその他の展示作品の鑑賞は不可能となる点、あらかじめご了承ください。

林 勇気